

遺跡分布論

はじめに

三友 国五郎

遺跡の発掘をはじめたのは昭和八年からである。北九州の海岸線の変化を調べるため貝塚調査をはじめたのがはじまりであった。爾来発掘調査をつづけてきた。いつも思うことは、遺跡にはどれ位の人々が生活していたのであろうか、村は何棟位からなっていたのであろうか、どんな社会構造であったのだろうか。遺跡地や住居趾が集って分布する傾向は何故であらうかということであった。住居趾の構造・内容その分布のあり方に、原始社会の謎をとく鍵があるように思えるし、遺跡分布は原始社会の構造を投影しているのではないかと考えるようになり、私なりの解釈を試みたのが、この小論である。

一、遺跡分布の特色

遺跡地の立地分布を見ると、その分布が必ずしも自然条件のよいところにばかり分布しているとは限らないし、自然条件が同じならもっと平等に分布すべきなのに、実際には分布が極めて不平等の場合が多い。ある盆地、ある川の流域には遺跡地があつまっているのに、そ

の近くにある他の盆地や河川の流域に遺跡地のない場合がある。こうした分布の不平等性は自然条件だけでは説明ができない。これは当時の社会構造を語っているのだからか。また遺跡地自体も小遺跡と大遺跡は内部構造の差で小遺跡が大遺跡に自然的に成長する場合もあるが、これらはお互に連関しあって、一つの群として捉える時、大遺跡の成立意義が理解できる。遺跡の分布の仕方にも小遺跡が密集している場合、大遺跡が散在している場合、大遺跡をとりまく小遺跡の群、種々の型がある。これは自然環境と時代・集団とのかわりあいによるものであると考える。

縄文早期の遺跡分布は局所的にあつまって分布する傾向が強い。この時代は住居趾の発見される例もすくなく、単純なものである。漂泊生活であったから、狭い特定の地域に零細な遺跡があつまるのである。例えば三島市の東方箱根火山の裾野には早期縄文遺跡が密集している。その分布が三地区にわけられる。『三島市誌』では



図1 横浜市内の茅山式遺跡分布図
(横浜市長による)

これを北上遺跡群・小沢遺跡群・錦田遺跡群にかけている。これら遺跡群はその数六〇余ある。そのうち早期遺跡の数四二である。北上グループは押型文が多く、茅山期は小沢グループに多く、錦田はその外縁とみることができる。

横浜市の鶴見川流域に茅山期の遺跡が多数あつまっている。四〇余所に及んでいる。このように遺跡地が集团的に偏在して分布している。これは自然条件がよいということだけではなく、茅山期の遺跡が既に集団社会を形成していることを語っている。

大宮台地の一部片柳支丘の遺跡分布をみると、縄文早期の遺跡数は三六カ所確認されている。そのうちわけは燃糸文系七カ所・田戸下層系二カ所・押型文系二カ所・茅山系二七カ所で、茅山系が急に増加している。茅山系遺跡は台地の縁辺に点在しているが、本支丘の先端、綾瀬川に突き出た台地に集中してみられる。茅山期遺跡が急増しているのは他支丘でも同じで、黒浜慈恩寺支丘二七、岩槻支丘三三、鳩谷支丘二八と急増している。茅山期は縄文早期も終わりに近い頃で、住居跡のでてくる遺跡も多くなってくるが、炉のないもので、定住性が乏しい社会である。また住居跡はなくて、一時的な炉穴が群をなして発見される場合もある。また岩槻市諏訪山では十数戸の住居跡が重なり合って発見され、定住生活であったことが推定される。それでも屋内に炉はなかった。このように住居跡や遺跡分布から考えると、茅山期ではあるものは定住生活に入ったものもあるが、住居も不定で炉穴、焚火を中心としたキャンプ的生活をなしているものもあった。こうしたことから血縁家族を単位とした群団的共同社会が推定される。こうした社会構造が遺跡の分布に投影されるのであろう。縄文早期の頃の

集落の実態はどうであつたらうか。花輪台では住居跡五戸発見されているが、二戸と三戸に区別できるので、小家族が夫々別棟にわかれて住んだ一大家族で、一つの村をなしていたのが大部分であらう。岩槻諏訪山のように二ノ三家族位で村をなしたのもあった。種々のケースが考えられる。

こうした小家族が群共同体をなして、領域内を漂泊していた。そのため早期の遺跡が、零細で局地に集合する所以であらう。だが早期も終わりの茅山期になると遺跡の数が急に増加し、分布圏も大きくひろがり、住居跡も多く発見され、縄文前期的な部族社会に転換しようとする時期と推定される。その理由は、茅山期には貝塚が多いことから、気候の温暖化に伴って自然環境がよくなったことが人口増加を促し、部族社会へと自律的に発展したのであらう。

二、縄文前期の遺跡分布

縄文前期の黒浜期の遺跡分布を東京湾を中心とその分布を見ると、東京湾の西側に多く、東側の千葉県側にすくない。自然条件を見れば、黒浜期は海進時代であるから貝塚遺跡が多い。とすれば、千葉県側にもっとあってよいはずなのに、実際はすくない。その分布圏を見れば鶴見川流域に特に密集している。その中心には南堀貝塚のような大遺跡が出現してくる。南堀貝塚は、付近の群小貝塚の中心的遺跡の感がある。環状に配置された住居跡の中心には広場的役割をなしたところがある。おそらくこの集落だけではなく、付近の村からもあつまってきたのであらう。いいかえれば、黒浜集団の中心的位置にあたる遺跡といえる。この遺跡は黒浜期から諸磯期にか

けた集落で、数戸内外の家からなる村で、住居趾のうちで特別大きい家がある。この村の中心的人物の家か、公共的な役割をかねた家と推定できる。兩堀貝塚のような大遺跡は、自然発生的なものではなく、部族集団の核的存在であることが、大遺跡をなす理由でなかるうか。

大宮台地の周辺にも黒浜期の遺跡・貝塚が多く分布している。岩槻支丘に黒谷・木曾良のような馬蹄形状の貝塚があり、大宮台地の南端の浦和に大谷場貝塚があり、台地の縁辺に数キロ内外の距離をもって分布している。これらの遺跡群のうちに、必ずといってよいほど大形の家（七ノメートルの辺をもつ）がある。小さい家なら二ノ三棟分の人間を収容できる家で有力者の家と推定できる。おそらくこれらの遺跡は一ノ二家族位からなる集落で、こうした遺跡は孤立しながらも互いに同族意識をもった地縁集団と推定できる。

埼玉県小川町は秩父山地の山麓地帯にある小盆地をなしたところで、狭い盆地内に、遺跡が一〇カ所余あつまっている。そのうちの一つである平松台遺跡を発掘した結果、関山期住居趾五棟・黒浜期一〇棟・諸磯期三棟が検出された。大形の家は黒浜期に一棟あった。関山期から諸磯期に及ぶ遺跡であるが、黒浜期が最盛期をなしている。この他に小川盆地内に多数の遺跡があるのは、盆地を領域として漂泊している集団があったことを示している。以上のように縄文前期の黒浜期の遺跡分布に三つのタイプがみられる。血縁性をもつ家族がいくつか集まり、それが地縁的に結びついた姿が想定できる。大形の家の出現、環状・馬蹄形状の集落の出現などから組織化された氏族集団であることがうかがわれる。水野祐氏は縄文前期は群团的

社会としているが、住居趾群の遺跡分布からみると、初期の部族社会ではなからうかと考えられる。もつとも同じ黒浜期でも地域の広狭によって構成社会はちがっていたのに違いない。小川盆地では群团的社会であったかもしれない。千葉県側は海に面したよい自然条件にありながら、黒浜期の遺跡がすくないのは、まだ部族社会をなすまでにいたらなかったからであろう。縄文前期も終わりになると諸磯期から海退となり、貝塚も減少し、遺跡もすくなくなり衰退に向かい、縄文中期になると様相がすっかりかわって、生活圏が海抜から山麓・山岳地帯に移ってゆく。縄文前期は黒浜期が発展期である。

三、縄文中期の遺跡分布

縄文中期は縄文時代を通じて発展期で、遺跡分布圏が拡大し、遺跡の分布も濃くなり、環状集落のような大集落趾が各地に出現した。出土する石器類の量も老大になり、特に中部地方の山岳地帯は中期文化の絶頂をなすに至った。こうした発展の基礎には原始農耕が行われたのでなからうかと考古学者や民族学者から提出されるほどである。東京湾を中心にして、その分布状態をみると、東の千葉県側に阿玉台文化圏、西側の西部山麓地帯・武蔵野台地に勝坂文化圏が並立した。阿玉台は漁撈的性格の強い集団で貝塚が多いが、勝坂式は狩猟的で、海岸近くにあっても貝塚をなすものもなく、いわば狩猟民族である。この様に生活様式に違いがあるのは、部族集団を異にしているからであろう。この並立した文化圏も加曾利E期になると融合して、分布圏も中部地方から関東全域に及び、中期の繁栄の絶頂をなした。各地に環状大集落が出現する加曾利Eをすぎると急

に衰え、後期をへて転換してゆく。後期になると千葉県側の海崖地帯に大貝塚群が出現し、重心が東関東にうつり、部族の移動があったことが思われる。

縄文中期の大集落としては、長野県尖石・八ヶ岳山麓、新潟県沖ノ原信濃川中流の段丘上、千葉県高根木戸・貝の花貝塚、東京都鶴川、埼玉県所沢市膳棚などが知られている。

(1) 尖石と与助尾根遺跡

八ヶ岳西麓標高一〇〇〇メートルの高原上に立地した遺跡で、尖石に三三の住居趾、与助尾根に二八の住居趾、この他多数の炉趾が発掘された。尖石ではほぼ環状に住居が配置され、中央は広い面積を占め、特別遺構があった。いわば共同広場と考えられている。住居趾には石壇があり、土偶立石を配した家、何もない普通の家もあって、村落内の人達の間には若干の差が認められ、統制された村である。呪術師・長老達のような人に統制された村と推定されている。この遺跡を中心に八ヶ岳山麓に二〇〇余の中期遺跡が散在しているといわれる。これらの群小遺跡は漂泊したキャンプ地なのか、それとも尖石を中心とする衛星の遺跡なのかわからないが、大集落とそれをとりまく小遺跡群は無関係でない。おそらく首長に統率された部族社会をなしたものと考えうる。

(2) 沖の原遺跡

新潟県中魚沼郡津兩町沖の原、苗場山麓の台地上に、径一〇〇メートルを越す大環状集落趾が発見された。五〇戸の堅穴住居趾が確認され、なお一〇〇以上が埋没していると推定されている。馬蹄形状に小石をモザイクした見事な炉趾をもつ家、直径一〇メートルを

越す大形の共同作業場と思われる家、皮をむいた栗、クッキー状炭化物が多数発掘されて注目をあびている。江坂輝弥氏は縄文中期後期にかけ断続的に一〇戸前後の集落がつくられたと推定している。

冬の多雪地帯、しかも四〇〇メートルの高台地状に、このような大集落が出現したことは、解明したい問題である。大形の共同作業場は日本海側に数例みとめられる。おそらく冬の積雪に堪えうる構造をもたせたものであろう。

(3) 高根木戸遺跡(貝塚)

標高二五メートルの台地、遺跡は阿玉台Ⅱ期から加曾利Ⅲ期にかけての堅穴住居趾七四基が検出されており、その配列は東北にひらく環状貝塚である。勝坂期の住居趾四、加曾利Ⅰ期一四、同Ⅱ期一四、同Ⅲ期二二が環状に配置、他に南東部に土壇群があり、中央は広場になっている。すくない時は一家族、多い時は四家族からなる集落で、人口も三〇人、多い時、数十人と推定される。特に後期に大きくなった。これは千葉県側の遺跡の特色である。

(4) 所沢市膳棚遺跡(図2参照)

縄文中期を主体として、平坦地に四八基の住居趾が検出された。未調査部分を考慮すると一〇〇余の住居趾が推定される。西側斜面には墓塚群がある。住居趾を時期別に分けると、初期のもの数基、中期(加曾利Ⅰ期)のもの一〇棟をこえ、終わりに近いものは二、三棟に減少して消滅している。膳棚遺跡の盛衰は南関東地方の勝坂期(形成期)加曾利Ⅱ(最盛期)、衰滅期の経過そのままをあらわしている。

(5) 鶴川遺跡

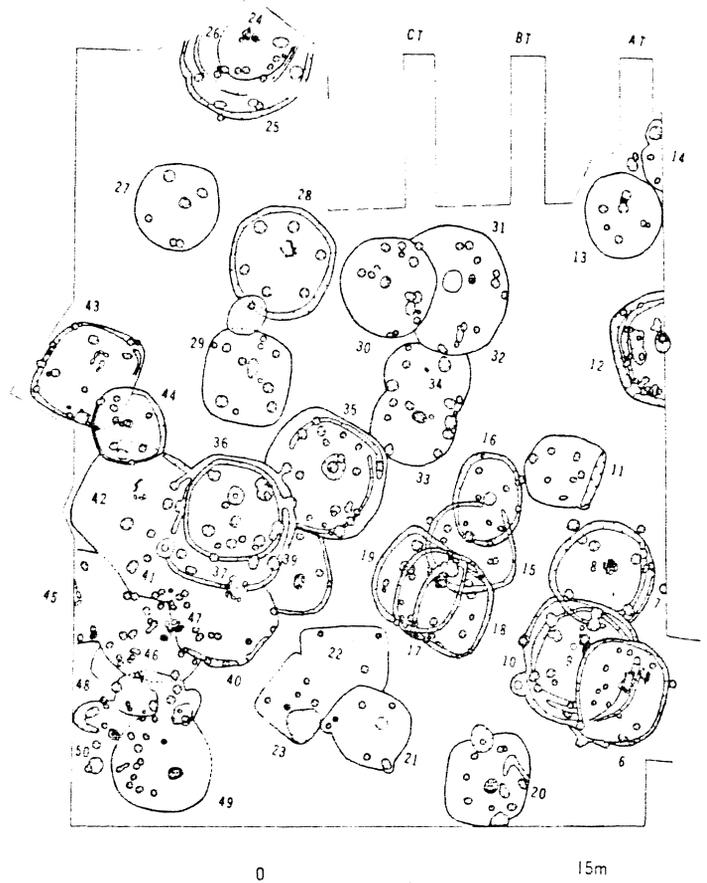


図2 膳棚遺跡 (埼玉考古学研究会)

標高九〇メートルの独立丘のごとき台地の縁にそって勝坂期から加曾利EⅡ期にかけて住居跡四四基が発見され、台地の中央部には広場が存在している、と報告されている。

縄文前期の終わり諸磯期末から南関東地方の遺跡が減少し、海岸線は後退して貝塚も減ってきた。西部山麓地帯に中心がうつり、特に中部地方は極盛期をなし、八ヶ岳山麓を中心とする中期社会が絶頂期をなして、関東地方はその周辺地域をなした。勝坂期の終わり

しかし、このような繁栄が原始農業にもとづくものならば、当然後期社会にうけつがれるべきであるのに、むしろ後期社会は衰退の傾向を辿っているところから考えれば、原始農耕は行われていなかったと推定される。縄文各期がそれぞれ発展・衰退のサイクルをもっていることは縄文期がまだ農耕でなく、採集狩猟が主体であることを示している、と思われる。そのため自然条件の変化に応じて、氏族集団は外的には集団の移動、衰退が行われ、内的には生産向上

頃から西部山麓地帯がクローゼアップし、加曾利EⅡ期になると、南関東が中期社会の核心地域になった。この文化圏は東関東・北関東・伊豆・南信地方にひろがったが、それらの地方にはそれぞれの地方自体の文化が主体をなして地方部族社会をなしたのである。南関東の縄文中期社会は加曾利EⅡを頂点として以後衰退期になる。後期(堀之内)縄文社会は下総台地(東京湾、古利根川の東側)が核心地帯をなすようになり、大環状貝塚遺跡が続々生れる。

このように繁栄した中部の縄文中期社会は農耕が行われたであろうと多くの学者にいわれている。

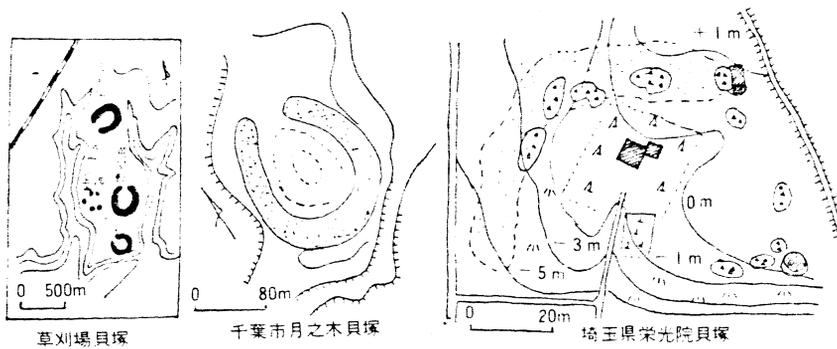


図3 貝塚遺跡

のため社会生活の共同化・集約化・呪的化が進んだものと思う。

四、縄文後・晩期の社会

縄文後期は堀の内期からはじまる。この期の環状貝塚は千葉県東京湾岸にあつまる。縄文中期からはじまり、後期に至っても引きつがれて、大貝塚群をなすに至った。代表的貝塚遺跡としては、市川市堀之内貝塚・曾谷貝塚、千葉市加曾利貝塚・草刈場貝塚・月の木貝塚、埼玉県栄光院貝塚、神明貝塚（これは埼玉県にあるが、実際は古利根川の東側にあり下総台地にある遺跡である）等がある。

このように後期の貝塚は下総台地の海岸地帯に多くあつまってくる。自然条件の変化により繁栄の中心が移動したものである。貝塚の状況を見ると、前期の貝塚には魚類・骨がすくないが、中・後期になると貝類の

他に多量の獣骨猪鹿魚骨類が出土している。これは狩猟技術の向上、共同化が行われた結果と思われる。中・後期の社会は集団化・組織化が進んだ部族社会であることを示している。住居趾は前期は方形・長方形が多かったが、後期は円形が多く、大きさは前期は大形の家があるが、中・後期は数メートル内外の中型の家が多く大形の家がなない。東京湾西側では隅丸方形不整五角形敷石趾等で、住居趾のプランからも東京湾の東側と西側ではちがった伝統をもった部族集団であることが語っている。東京、神奈川県地方に環状方形配石遺構が発掘されている。縄文時代後期の特異の遺構で、小礎を二五ノ四〇センチの幅で帯状に方形にめぐらしたもので、石器・土器・石棒・石製小玉等が出土している。共同社会の祭祀の場として推定されている。その分布は今のところ東京都下、神奈川県に限られている、非常に狭い範囲である。千葉県側の貝塚遺跡集団とこの集団とは同じ縄文後期のものであるが、明らかに生活伝統を異にしている部族集団であることを示している。

(1) 安行期（後晩期）

後期は堀之内・加曾利B・安行I・II期と経過するが、遺跡の数が次第にすくなくなる。

大宮台地の周辺は安行期の遺跡が割り合いに多い。南部の川口市安行では貝塚をなす遺跡が多いが、内陸部の遺跡は河川や低地にある。また台地上にあるもの、沖積地の微高地にあるものもある。出土遺物は土偶、石玉、耳飾、石剣、土鍾等が多い。河沼の魚骨的性格の強い集団である。安行式は東北の大洞式にもみられるが、主体性を失うことなく、個性の強い集団である。晩期になると遺跡数もすくなく、個性の強い集団である。晩期になると遺跡数もすくなく、個性の強い集団である。

とすくなくなる。それは継続期間が短いことも原因であろう。やがて衰退期に入り、関東地方は無人の野になった感さえある。次の弥生中期社会が出現するまで、大きな空白期間がある。解明できない謎である。

(2) 高井戸東遺跡(埼玉県浦川市)

この遺跡から発見された住居趾は二五、土垣一五〇が広さ南北八〇メートル・東西一二〇メートルの中にあつた。一単位の集落の広さである。この遺跡は加曾利Bから安行ⅢA期にわたるもので、各期の住居は窪地をはさんで東西の二区にわかれて配置されている。発掘した住居趾を時期別にみると、加曾利BⅠ期六、加曾利BⅡ期六、加曾利BⅢ期五、安行Ⅰ期四、安行Ⅱ期三、安行ⅢA期三となっている。プランは古い加曾利B期が円形、安行期から方形になっている。村は東区三棟、西区一棟となっている。おそらく東西の二区にわかれて、二家族住んでいたが、安行Ⅱ期・ⅢA期には東区だけになって一家族の村と推定される。出土物は土偶二一のうち住居趾からでたもの一、土版一〇、土製耳飾一二八、石剣・石棒三五、玉類二〇でいずれも住居趾から発掘されたものが多く、呪的意識が強い社会をなしていた。本遺跡をみても後期社会は急に衰退していることがわかる。浜松市の蛇塚の場合をみると、住居趾二八基が発掘された。何れも堀之内期から晩期に及ぶものであつた。住居は東西のグループに対立して、おそらく二家族で村をなしたと推定される。ここでは後期前半が七基、後半六基、晩期一三基となっている。家は方形・長方形をなし、切妻屋根が基調をなしている。さらに晩期に棟数が増加しているのが目立つが、これは西日本にみられる傾向で

ある。

縄文晩期は遺跡の数がすくなくなり、小さい村となる。出土物も土偶・土版・玉類・石剣等が多い。これは東日本に強く、西日本に弱い傾向である。土器をみても、東日本では複雑であるが、西日本では簡素化して、東西日本の二つのブロックにわけることができる。歴史時代になってからの東西日本の対立はすでに縄文時代にねざし、相対的にみると、後晩期は東日本では衰退期であるが、西日本では完成期で、遺跡数も中期より後期にかけて増加している。九州の晩期では靉痕の出土も各地に報ぜられていて、次の弥生期への発展が内在しているといえよう。このことからいっても東西日本に大きな断絶がみとめられるのである。

弥生前期の遺跡分布も、稲作の伝播も、急速に伊勢湾までひろがりそれより東に及ばなかったがその原因もこの断絶によるといえよう。

(3) 九州の遺跡分布

九州の縄文早期の文化は数種類みられ、それぞれの文化は地域的に分布して、並立していたと河口貞徳氏は指摘している。即ち、

1. 石坂式貝殻文を主とするもの、これは南九州に分布している。
2. 本土より入ったといわれる押型文は他を随伴しながら、九州全域にひろがり分布している。

3. 曾畑式は北九州から九州西岸及び南島に分布しているが、九州東岸には分布していない。大陸に閉係しているといわれている。
4. 轟式といわれるものは、熊本県から鹿児島県に分布している。
5. 石峯式は押型文と熊糸文の融合によって生じたもので、鹿児島

湾頭に限られている。

一般に関東地方と同様にこの地方の遺跡分布も局地的に限られる傾向が強い。土器の形式は偏年を示しているとともに、地域差を示している、文化圏が地域別に成立している。こうした分布は縄文前期にもみられる。縄文前期には塞之神式があり、A・Bの二式に区別している。

これは編年を示しているが、その分布状況を見ると、A式は南九州西部に多く、B式は九州東部（宮崎）に多い。中間型は二地域の中間に分布している傾向がある。これはそれぞれが集団をなしていることを示している。A・Bに編年差があるならば集団の移動、文化圏の移動を示すことになる。この塞之神式は種子島・屋久島にも分布しているの、海洋的な集団と山岳的な集団とに区別することもできる。

ここでは、指宿式と市来式の分布の二様式をとりあげて論ずることとしよう。指宿式・市来式は、縄文後期の土器で南九州に分布する特色ある土器である。両者の分布は一致する遺跡もあるが、どちらかという指宿式は奥地山地に分布し、市来式は沿海地方に限られ、貝塚をなすものも多く、また海浜に立地しているものさえある。市来式の分布は南九州が主体で、さらに種子島・屋久島・永良部島の南島地方にも多いことから、島々を舞台に活躍した海洋民であることが推定できる。分布の北限は島原半島である。指宿式は既述のように奥地山地に居住し山岳民族といえるかもしれない。鳥居博士が狩猟民・魚撈民とわけたのが、ここではそれを裏付けている。模様をみても市来式はすべて貝殻で模様をつけて、海洋民であることを



図4 系式別遺跡分布図

語っている。時代はずっとおくれるが、南九州に熊襲・隼人という異民族がいるがこのことは縄文後期の頃にすでにねぎざしているとも考えられよう。

熊本を中心としたところには御領式という文化圏がある。御領式は九州全域にみられるが、北九州・南九州に分布しているものは断片的附屬的で主体性は認められず、熊本地方には見事にこの文化圏がつくられ、大遺跡もあって、この地に集団の核があったことが推定される。模様もすくなく簡素化され、研磨されたものもあり、次の弥生式への胎動すら感じるほどである。西日本晩期縄文土器は簡素化の傾向をたどっているがその起原はここに根ざしている。

以上南関東地方、南九州の縄文遺跡の分布を概観した。これで結論をだすのはどうかと思うが、平常考えていることをまとめてみれば、次のとおりである。

縄文早期の社会は群团的共同体である。各地にそれぞれ孤立した文化圏が成立し、局地的に遺跡地が集合する傾向がみられる。早期末の茅山期になると、急に遺跡数が増して、分布圏もひろがって、前期社会に近い。

縄文前期には分布圏がひろがり、定住化が進み、一族で一村をなすのが普通で、村々は地縁的に結合していた社会で、中心的な大遺跡が出現するようになり、氏族社会をなした。

縄文中期社会：分布圏がさらに拡大し、数家族からなる大遺跡（環状集落）が出現。小遺跡も急増加して、大遺跡と結びついた特殊遺構をもった住居跡の出現、統制された部族社会である。山岳山麓地帯に生活の根柢をおいた集団、海岸地帯に生活した部族集団がみとめられる。

縄文後・晩期社会：中期社会と同様の社会であるが、遺跡数は減少する。特に晩期の遺跡がすくない。大遺跡も晩期になると一・二家族からなる小集落である。土偶・土版・石棒・石剣・装飾品が多くなる。統制の強化された社会であるが、衰退期である。

以上の各期とも、集団に入らない落ちこぼれた一家族位の零細遺跡も多数散在していたと思われる。

土器編年表をみると各地にそれぞれの文化圏をもった土器形式がある。その形式が細分される傾向にあるのは、それだけ各地に独特の文化を残した部族集団があったことを示していることになる。藤岡博士の先史時代の地域区分も、つきつめれば、部族社会の成立を規正する自然区分になる。標準形式は編年（時間）を示すとともに、地域差（空間）を表現している。地域を限定すれば、編年をあらわ

すが、地域をひろげれば、地域差をあらわしてくる。縄文中期の土器に九州熊本を中心として阿高式という土器がある。日本海側に馬高式土器（火炎土器）がある。この兩者を比べると技法には中期の共通性を見るが、器形、模様はまったく異質で、単に地方差・風土差では説明できない。異なった文化伝統をもった部族であると考えざるを得ない。これは一例を示しただけである。地域差は集団の違いと考えてもよい。

五、弥生期の遺跡分布

福岡平野には多数の弥生遺跡地がある。その遺跡群のなかで須玖の遺跡はとびぬけている。多数の鏡・銅剣・銅鉾・玉類をだしている。それに反して、他の遺跡群からできるものは貧弱なものばかり、なぜこんなに相違があるのだろうか、それはそのまま当時の社会を表現しているであろう。須玖は支配者の遺跡であり、群小遺跡は被支配者の遺跡としてとらえることもできる。初期の原始国家の段階で、『神志倭人伝』に出てくる国は、この弥生国家をさしていることは



図5 福岡平野の遺跡

表1 遺跡群一覧

遺跡名	出土品	比定国
須玖	漢鏡(35)、銅鉞、銅劍、玉類	奴国
三雲 井原	前漢鏡(34)、後漢鏡(118) 銅劍、銅鉞、曲玉、管玉	伊都国
汲馬場 桜馬場	多紐細文鏡(1) 後漢鏡(2)、銅劍、銅鉞	末盧国
立岩	前漢鏡(10)、銅鉞、銅劍、鉄戈、玉類	不弥国?

()内数字は個数を示す

定説となっている。こ
うした弥生遺跡の分布
は福岡平野だけではな
く、遠賀川の上流嘉穂
盆地、福岡県糸島郡に
も認められる。これら
の三地域は私が昭和一
〇年頃に現地調査した
所でもある。

(1) 立岩遺跡

福岡県遠賀川の上流
に飯塚市がある。昭和
八年に立岩遺跡が発掘
されてから、今日まで
何回もくりかえし発掘
された。この遺跡群の

そこにこのような豊富な遺物を出したことは、単なる共同体の主で
なく、嘉穂郡全体を支配した支配者であった。立岩には石庖丁の製
造所があるが、その石庖丁が郡内一円はもちろん北九州に見られる。
この点からも遺跡群を支配したと考えうる。北九州の弥生原始国家
と推定される遺跡地から出土したものを表にすれば表1の通りであ
る。

甕棺墓には階級性はないといながら、共同体社会の中で漸次族
長層に進む状態は見逃せない。立岩堀田一〇号、須玖の漢鏡三五面
に三雲・井原にいたってはもはや族長の概念を超えた支配者王の性
格に近いものを感じさせる。糸島郡三雲・井原の遺跡群も、須玖・
立岩と同様の分布を示している。

桜馬場・汲馬場を末盧国、三雲・井原の遺跡を中心とする国を伊都国、
須玖を中心とするところを奴国とすることは、一般にみとめられて
いるが、考古学的にもいえる。次に出てくる不弥国については糟屋
郡宇美地方とする説が古くからいわれているが、最近考古学が発掘
の結果から飯塚地方が児島氏によってあげられている。

なかの一点に集中して一〇面の前漢鏡・銅器・鉄器・貝輪、数百個
のガラス製品が出土した。調査者児島隆人氏は立岩の君といったが、
まさしくその通りであろう。貧弱な懸棺ではあっても、ててきたも
のは古墳時代の族長層のものより勝れたものである。もうこれは当
然支配者と考えてよいのである。付近の弥生遺跡の分布をみると
その数は一〇〇をこえている。弥生中期の遺跡が最も多く、それも
嘉穂郡一円に群をなして分布している、各遺跡群は遠賀川の支流に
よって、立岩に結びついている。立岩は各遺跡群の核をなしている。

一さて北九州弥生国家群の成立過程については、この地方は弥生初期
に既に米作農業に入っていた。当時の農作物である米・粟粒が発見
され収穫用具として石庖丁・石鎌が多数出土し、多量に製作された
遺跡も知られている。こうして農耕社会に入ったために、共同体を
基調としながらも、有力家族が共同体から生れつつあった。鏡山猛
氏によって調査された比恵の遺跡は濠をめぐらして数戸の家、井戸
・倉を含んでいた。一氏族の遺跡である、生産の能力差が貧富を生
じ、族長層が生れる。農業共同体が自律的に発展して階級社会に変

質してゆくと考えられているが、それだけではなく北九州の弥生国家群の場合は海洋民の活躍によって通商王国をなすに至った。しかしそれを支配したのは半島より渡来した扶余系の部族であろうと水野祐氏は述べている。

およそ社会の発展は自然環境に対応しながら自律的に発展するとはいうまでもないが、それに外的刺激が加えられると一層促進される。縄文中期の発展、北九州弥生国家の出現、大古墳群等は外的刺激、民族部族の移動などによるものである。北九州にきた外来人は大陸で国家組織の経験者であった。たとえ大陸から追われた人たちであっても、その経験をいかして新天地に支配者として国を打ちたてた。それと同時に農耕技術を総合的に移入した。これが南方から伝わった稲と結びついて、北九州にいちやく米作農業が行われた理由であろう。北九州と大陸の石器群の類似性、支石墓も朝鮮より伝わったものであるならば、それらの渡来者は何回も、波状的に渡来したものであろう。こうした直接的な刺激が北九州に弥生国家群を生ぜしめた大きな理由である。騎馬民族説に近い考え方である。

各種の弥生遺跡の分布圏を通じて考えられることは銅剣・銅鐙文化圏と銅鐸文化圏が対立していたことである。前者の中心は北九州である。剣は鏡・玉をセットして墳墓に埋められた。この風習は古墳期になると、初期の古墳にうつがれている。それと同時に銅鐸は急に消滅してしまふ。これは何を語っているのであるか。北九州の原始国家の東方への進出も考えられる。

弥生前期の遺跡分布をみると、北九州から一つは九州の西海岸を

伝わって南下し、種子島まで及んでいるが辺境的文化圏である。他は瀬戸内から畿内、名古屋に及ぶ広い分布圏をなし、この分布圏内に、銅剣文化圏と銅鐸文化圏が生れている。九州と本土の分布状態、内容に何故このような相違があるのだろうか。地理的条件だけでは説明できない。人間集団の移動が考えられるべきであると思う。文化を吸収するのは人間であって、自然は可能性を与えるだけである。それを生かすのは人間であるといいたい。

参考文献

- ① 『三島市誌』
- ② 『横浜市史』
- ③ 『千葉市史』
- ④ 『大宮市史』
- ⑤ 『中種子郷土誌』
- ⑥ 『名瀬市誌』
- ⑦ 『片柳・岩鏡台地遺跡調査』
- ⑧ 『膳棚』 埼玉大学考古学研究会
- ⑨ 後藤守一 『縄文時代の住居』 考古学講座
- ⑩ 正坂輝彦 『考古学ノート』
- ⑪ 酒誌伸男 『貝塚の話』
- ⑫ 藤森栄一 『縄文農耕』
- ⑬ 『埼玉県遺跡調査報告書』
- ⑭ 『鹿児島考古学会紀要』七・八号
- ⑮ 『埼玉考古』十三・十四号

- ⑯ 麻生 優 『縄文時代後期の集落』
 ⑰ 小野忠熙 『弥生時代の共同体』
 ⑱ 児島隆人 『立岩』
 ⑲ 三友国五郎 『先史集落について』
 地理学評論十四卷五号
 ⑳ 『先史時代の集落』考古学
 (昭和12年)
 ㉑ 鈴木保彦 『環礁方形配石遺構の
 研究』考古学雑誌62の1
 ㉒ 水野 祐 『日本国家の成立』
 ⑳ 国分直一 『南島の古代文化』
 ㉒ 石田英一郎 シンポジウム
 「日本文化の潮流」
 ㉓ 原田大六 『実在した神話』

A Study on the Distribution of Archeological Sites

Kunigoro MITOMO

In this article the author considers, through the examination of the distribution of archeological sites and their ruins, changes in community life during the transition period since early Jomon period. The ruins of early Jomon period are generally small in size and show rather limited local scale of territorial organisation. Middle Jomon period is characterised by the notably large size of settlement(local community), due to the rapid increase in population. It gave birth to the large size communities with more than 10 - 15 houses(2 - 4 clans), which had never existed before. In late Jomon period (including the terminal stage of Jomon), number of ruins and archeological sites which we can reconstruct decreased, while we find increased number of personal ornaments and sculptures of various kinds belonging to this period.

It appears that, in middle and late Jomon periods, the clan consisted of several small unit groups of houses, this unit groups constituting a community. Probably the clans of a certain territorial extension formed a tribe. Toward the end of Jomon period the number of such large size community decreased. We can explain this fact supposing that the economic basis of Jomon age life was not laid in agriculture but in hunting, food-gathering and fishery.

The research on the settlement sites of middle Yayoi period in Northern Kyushu have revealed that the community size of that period had been of more than 100 houses. Suku and Tateiwa site demonstrate the most representative cases of middle Yayoi period settlement. Among the finds there are funerary urns(kamekan), noteworthy for many bronze mirrors and other bronze implements found with these urns, which supposedly were used for the burial of the clan chieftain. The appearance of the first primitive state may date away back to middle Yayoi period.